

「ペットはカスガイ」

ペットの飼育をきっかけに多くの家庭でいろいろな変化が起きています。マース ジャパンの調査によると、「ペットを話題に家族と話す機会が増えた」と感じているペットオーナーは71.3%いることがわかりました。ペットの種類別で見ると、ドッグオーナーで73.7%、キャットオーナーでは68.8%となっており、犬も猫も家族の「鏝(かすがい)」になっているようです。

少し違った視点で見ると、さらにその側面が伺えます。「ペットを囲んで家族が一緒にいる時間が増えた」とするドッグオーナーは43.7%、キャットオーナーでは34.8%となりました。また、「ペットの飼育を通して、家族の良い面を見ることができた」(ドッグオーナー35%、キャットオーナー30.6%)、「家族への思いやりの気持ちを以前より養えるようになった」(ドッグオーナー29%、キャットオーナー23.1%)、「ペットがケンカの仲裁をしてくれる」(ドッグオーナー21.7%、キャットオーナー14%)などの結果からも、ペットが家庭の中でさまざまな効果を発揮していることがわかります。

これをさらに年齢別・男女別に見てみると面白い傾向が見えてきます。まず、年齢が高くなるほど「家族と話す機会が増えた」との回答が多くなり、最も回答率が高くなるのは、ドッグオーナー、キャットオーナーとも50歳代の女性です。すこし意地悪な見方ですが、子供が独立し、共通の話題が少なくなった夫婦の間で、話題を提供しながら、仲を取り持つ役割を担っているペットの姿が目に見えてきます。一方、「家族が一緒にいる時間が増えた」という項目では、若い世代の回答率がやや高くなり、男性20代のドッグオーナーでは55.8%と最も高く、全体回答率と比較すると16ポイント以上も上回っています。この背景としては、働き世代にありがちな家族との距離感や、メディアツールのパーソナル化による若年層のコミュニケーションの希薄化など、ライフスタイルの変化などがあるのかもしれない。

そして、トップ回答ではありませんでしたが、「家族のよい面を見ることができた」、「家族への思いやりを養えるようになった」と回答した人が全体で3割前後あったことも興味深い点です。特に、40歳代、60歳代の男性ドッグオーナーの4割以上が「思いやりを養えるようになった」と回答しています。これは、長い年月を共に過ごしてきた家族に対して、忘れかけていた思いやりを思い出すきっかけとしてもペットが大きな役割を果たしているといえます。まさに鏝の大活躍です。

まもなく夏休み、家族と過ごす時間も増えるシーズンです。久しぶりにじっくり顔を合わせるけれど、なぜか会話が弾まないご家庭では、ペットの力にさらに期待が集まりそうです。

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に1997年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ(CAIRC)とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進しているPIASと協力して発行しています。

お問い合わせ: マース ジャパン リミテッド 広報室 電話:03-5434-3334

